

俳句

—女子中高俳壇より—

朝虹



森永星郎

木曾の宿

大根干す軒に甲斐駒遠すめり
林中につまさき立ちて年木割る
足の上に炬燵のあつし木曾の宿

川島寛治

関見の峠

雪解の瀬雪崩の底に激^{うが}ちをり
雪折れの樹脂したたらす峡深し
風立ちて野に雪上車見失ふ

同

吾子の四季

木下信夫

万緑

父となる夜や口ずさむ聖誕歌
初子抱き憶良の歌を読みはじむ
空にあれば他家の幟も吾子のもの
虹を指す父の指見る吾子いとし
灯下親し膝の子に学継がせたし

眼にみどり溢れて朝のしづごころ
万緑にわけ入って水掬^{たぐ}ひけり
水無月の雲の遠さよ街ひかり
街の音ふと絶え揚羽ひるがへる
蛙鳴き野の夕風に松軋む

那須乙郎